

税の大切さ

川口市立戸塚中学校3年 島原 千穂

私が、小学校二年生から三年生に変わる春休みだった。自転車で母と姉妹と近くのスーパーマーケットに自転車で出掛けた。祖母から買ってもらったピンクのかわいい自転車だった。スーパーの駐車場から道路へ出てきたところで、左から走ってきた車にぶつかった。ドスンという鈍い音とともに私は宙に投げ出され、背中から道路へ落ちた。一瞬の出来事で、自分が何がどうなったのか、すぐにはわからなかった。車に乗っていた男の人はすぐに車から降りてきた。母は、大きな声で私の名前を呼んでいた。ボーっとしているうちに救急車がやってきた。警察官もやってきた。咄嗟に「捕まってしまう」と思い、恐怖が身体じゅうを包んだ。私は泣くしかなかった。そのあとは、救急車に乗せられ、病院にいき、診察やら検査を受けた。しかし、また、救急車に乗って次の病院に向かった。救急車の中では、隊員の方がずっとそばにいてくれて声をかけ続けてくれた。少しずつ、恐怖は和らいでいき肩から力が抜けていった。それから、大きな病院につき入院となった。どこも痛くないのにその時は不思議だったが、脾臓から出血していたらしい。退院してしばらくして、警察に行った。交通事故のときの様子を詳しく話すためだ。警察官に質問され、そこに自分のした行動を答えた。警察官の方は優しくきちんと状況を整理してわかりやすく話してくれた。なぜ、事故は起こってしまったのか、私は何が悪かったのか、これから自転車に乗るのにはどうすればよいのか、等、教えてくれた。正義の味方こそ、警察官だと思った。

それから、五年生になり、社会科の授業で租税について勉強した。救急隊の仕事や警察官の仕事は税金によって賄われていることを知った。救急車を呼んでもお金はかからなかった。その費用は税金を使っているからだ。だから、誰でも、どんなときでも、傷を負って動けなかったり急に重い病気にかかり一刻を争うときには安心して救急車を呼ぶことができる。警察は私たちの安全を守っている。事故や犯罪が起きた時いち早くかけつけ、解決に導くようにしてくれる。私の事故の時も親身になって考えてくれた。事故の相手の人と私の間に立って一番いい方法を出してくれたと思う。日本中の事故、犯罪にはいなくてはならない存在だ。

その救急隊や警察官を支えているのが税金だ。税金は私を助けてくれたのだ。

次は私の番だ。将来、私を助けてくれた警察官や救急隊の方のように優しい思いやりのある人になり、税金をきちんと払えるように仕事をしたいと心から思った。

そのために今は世の中の仕組みについてきちんと勉強し、税金の制度がどのようになっているか理解しようと思う。将来は私たちの納税にかかっているといても過言ではないはずだ。